

---

デジタルパンク通信 第十一話 2001年3月号

---

Q 支援でしょうか。抑圧でしょうか。

A 抑圧です。

パリでスパイのようなことをしていた頃、フランスの気合いを痛烈に感じました。国と資本家が一緒になって文化を育ててるんです。かつて王族や貴族がパトロンになっていた伝統を、国家や企業が受け継いでるわけです。自国の芸術を政策的にブ厚く支援して、英語文化やハリウッドに対抗しているのです。アイデンティティをかけているのです。

文化の原点はメシのうまさにあって、だからフランス人はイタリア人や中国人や日本人には一目おいています。アメリカ人やイギリス人は、ケチャップだらけのパン食いながら泡の出る黒い砂糖水なんか飲んで、ヤードとかガロンとか華氏とか変な単位使ってるイナカ者です。フランスのジジイ連中は、ディズニールンドは悪の巣窟だと思っているのです。

パトロンが少なくなった現代、国の庇護というのは、芸術のように出来上がったものを保ったり防衛したりするには有効なシステムなのでしょう。フランスが文化国家の面目を保ってるのは、そのおかげでしょう。日本も文化政策を充実させよう、というテーゼには心動かされるものがあります。

しかし、何か新しいものを生むときにはどうでしょう。例えば、ポップな文化でフランス産といえば、印象派の頃の絵画、シャネルのファッションモード、ヌーベルバーグ映画まで、ってところでしょうか。これらは庇護されて澱んだ表現への反発みたいなもんです。

アメリカのジャズやラップ、イギリスのパンク、ニッポンのマンガやゲーム、共通しているのは、支援や庇護とは対極の、抑圧された表現者たち、格差や貧困、餓死寸前、それでも既成の表現に反発して、自分で表現してしまう血の濃さ、ということ。

だから考えてしまうのです。支援するより、いっそ人為的に痛めつけた方がいいモノが出てくるのかもしれないって。日本でも、戦争や食糧難で苦しかった時にはすさまじい表現があったのに、バブルの頃にはロクな表現がなかったんじゃないかって。

そーゆーこと考えるの危険ですかね、でも例えばこういう問いはどうでしょう。徹底的な弱肉強食がいいのか。あるいは業界内にカネが循環するようにしておいて、新人そだてたりアーティスト保護したりしながら、みんなでそこそこ食っていくというタイプがいいのか。どっちでしょう。

プロでも食うや食わずの暮らしだが、世界チャンプになれば豪邸住まいのボクシング。世界で闘わなくてもレッスンプロとかでけっこう食えるゴルフ。さてどっちが好きですか。音楽システムとしてどっちを採用すべきだと思いますか。

---